

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第 24 回
 第 5 章 古田足日先生
 その 3 社会にひらく「散文」(中の後半)

昨年(2024 年)は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』(童心社 1974 年)の刊行 50 周年だった。私が古田足日先生(1927~2014 年)に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は 19 歳だった。

『いま、教科書は…』

前回のおしまいに紹介した鬼頭七美さんの論文「古田足日と国語教科書—『モグラ原っぱのなかまたち』を中心に—」(『子ども学』第 10 号、2022 年 5 月)は、「国語教科書の編集委員を長く務め、自身の作品も掲載され続けるなど、国語教科書に深く関わり続けた」古田の国語教育観、国語教科書観を明らかにしようとしたものだ。論文は、1980 年代のはじめに、小学校の国語教科書が偏向しているとした自民党の攻撃のことから書き出されている。

以下は、1980(昭和 55)年に自由民主党広報委員会新聞局が発行した新書タイプの本『いま、教科書は… 教育正常化への提言』(注 1)の「はじめに」の締めくくりである。

いま、日教組によって教育の場が荒廃しきってしまった。その上、毎日手にする教科書が、左翼イデオロギーによって汚染されつつあるといわれる。

わが子の、そして日本の若者たちの将来を考えると暗澹たる思いさえする。

父母が、一億の国民がこの点からも教科書に関心を持たなければなるまい。これに答えるものとして、なまの教科書の姿を世に問う気もちから、この書は生まれたものである。

本のなかでは、小学校の社会科と国語の教科書が批判されている。国語については、部落問題研究所が編集した副読本『文学読本 はぐるま』(1972 年)に掲載されている作品が 1980 年度版の検定教科書にいくつも収録されているとして、八つの教材をとりあげて批判している。八つは、「おおきなかぶ」(アフナーシェフ、西郷竹彦訳)、「かさこじぞう」(岩崎京子)、「村いちばんのさくらの木」(来栖良夫)、「大きなしらかば」(アルチャーホワ、西郷竹彦訳)、「おかあさんの木」(大川悦生)、「一つの花」(今西祐行)、「川とノリオ」(いぬいとみこ)、「ペロ出しチョンマ」(斎藤隆介)だが、それぞれへのコメントのから少し引用する。

「おおきなかぶ」

これは小学一年生用の教材である。どの教科書にもみな載っており、日本中の小学一年生は全員これを勉強させられるわけだが、これがなんとロシアの民話である。作者はソ連の民族学者アフナーシェフ。(中略)「団結」や「集団的労働」(いずれも『はぐるま』の「指導の手引」にあることば—宮川注)を否定するつもりはさらさらないが、それを教えたければ日本の民話にも同じようなものがあるにもかかわらず、小学一年生から、なぜソ連の民話を学ば

せなければならないのだろうか。(注2)

「かさこじぞう」

「かさこじぞう」は日本の民話だが、これはひどく暗い貧乏物語だ。

「一つの花」

「一つの花」は、戦争で父を失った女の子とその母を描いた物語であるが、これは日教組などによって「平和教材」の代表作とされている。これを読んだある母親は次のような疑問を提出している。

「この物語では、出征する父の見送りが娘を背負った母親だけになっていますが、これは事実と反しているのではないのでしょうか。あのころの出征兵士の見送りといえば、隣近所をあげての行事だったはずですよ。この作品は、戦争を否定し平和を強調しようとして事実をねじ曲げ、人間の心の分析をあやまっているように思います」

この傾向は今西氏の「一つの花」だけではない。すべての「平和教材」は、不当な「誇張と省略」により、「反戦平和」をたくみに党派的な主張につなげているのである。小学四年生用。

「川とノリオ」

「川とノリオ」は、父親を兵隊にとられ、母親をヒロシマの原爆で奪われた幼児ノリオの話である。この作品は「戦争への激しい憎しみを訴えるいぬい・とみこの傑作のひとつ」(はぐるま・指導の手引)とされている。さらにこの作品は、「教え子を再び戦場に送るな」という日教組のスローガンを、そのまま物語にしたような“安保破棄もの”としても高く評価されている。(カッコ内原文)

古田先生は、なぜ、教科書にかかわるようになったのか。

こうした自民党の教科書攻撃に対して、日本共産党の機関紙『赤旗』や部落問題研究所の『部落』などが、いち早く反論の記事をのせたが、日本児童文学者協会の機関誌『日本児童文学』も、1981(昭和56)年の9月号から12月号まで、4回にわたって、緊急連続特集「国語教科書「偏向攻撃」問題を考える」を組んでいる。また、同協会は、緊急連続特集と同時期に、編著書『国語教科書攻撃と児童文学』(青木書店)を刊行した。日本児童文学者協会のこうした動きの中心のひとりが古田足日だった。『国語教科書攻撃と児童文学』の編集委員も、安藤美紀夫、来栖良夫、鳥越信とともにつとめた。

古田は、その『国語教科書攻撃と児童文学』に「自民党の国語教科書攻撃と児童文学中傷—その実態とねらい—」という文章を寄稿している。「ぼくは一九七一年使用の教科書から小学校国語教科書の編者の一人となり、現在もやはりそうである。ぼくがなぜ教科書にかかわるようになっていったのか、まず、そのことをしっておきたい。」と書きはじめられるのだが、この教科書は、もちろん、日本書籍の小学国語だ。

教科書の編集委員の依頼があって、日本書籍や他社の教科書の内容を確認して

みた古田は、そこに世界名作や日本の創作の再話（原作の書き直し）やダイジェストが掲載されていることにショックをうけたという。

そこでぼくは、ぼくが教科書づくりに参加することの意味は、一口にいえばすぐれた児童文学作品を子どもに手渡すこと——その内容は再話をなくすこと、文学教材の名に恥じない作品を入れること、そのなかには今の子どもの感覚に訴えるものがなければならない、そして教科書をもっと子どもに近づけたい、と考えたのである。

だから、古田は、「こんどの自民党の小学校国語教科書攻撃はぼく、ぼくたちのこうした願いをすべて踏みにじろうとしている。」といわなければならなかった。先の『いま、教科書は…』には、「(新しい教科書は) 著者・編集者の努力もあって、わたくしたちの研究の成果を取り入れています。国語の文学教材では、質の高い作品が原作のまま取り上げられています」(日教組教科書白書)(カッコ内原文)という引用があって、「新しい教科書ににじむ党派色を明白にしたもの」と位置づけられている。古田は、「なぜ「原作のまま」が「党派色」につながるのか。こんな理屈はあり得ない。」という。また、この引用が日教組教科書白書（日本教職員組合編『小学校教科書の研究』1980年版、一ツ橋書房1979年）から「自分に都合の悪いことは抜かした「再話」的なものである。」として、具体的に述べている。

鬼頭七美さんの論文「古田足日と国語教科書」も、この「自民党の国語教科書攻撃と児童文学中傷」について書き、その後、古田が1985（昭和60）年に発表した文章「国語教育と教科書」（『法学セミナー増刊』2月）（注3）も紹介している。

（「国語教育と教科書」のなかで一宮川注）古田は「おおきなかぶ」の教材化について1971年頃の状況を振り返りながら、「当時の日本書籍の教科書ではこの作品は全文収録ではなく、ダイジェストでもなく、「うんとこしょ、どっこいしょ」ということばを出しただけだった。「この民話を矮小化するよりはまだしもこのほうがまし」と考えたから」であると述べている。この評論が書かれた1985年時点では全文収録となっており、原作・原文のまま作品を掲載することがようやく浸透したことを、この回想は物語っている。それとともに古田は自身の教科書掲載の作品について、ある子どもの母親から「ぼく自身の作品が改変されおもしろさを失っていることを指摘」された経験も紹介している。

鬼頭さんは、この回想で語られた「おおきなかぶ」や古田自身の作品（『モグラ原っぱのなかまたち』あかね書房1968年の「2番めの話 先生の目はエックスせん」）の教材化の実際について調査し、検討していく。

日本書籍小学国語編集委員会

私自身は、古田先生にさそっていただいて、1989（平成元）年度版から、日本書籍の小学国語編集委員会に参加した。新しい児童文学作品の教材化の提案をもとめられての参加だったが、最初は教科書というものの仕組みが呑み込めずに苦労したり、迷惑をかけたりした。

日本書籍の編集委員会には、いろいろな民間教育研究団体の中心で活動している現場の先生たちが数多くいらっやって、教材を検討する議論などの折々に、それぞれの教育実践の話聞くことができて、おもしろかった。民間教育研究団体といったのは、「日作」（日本作文の会）や、「児言研」（児童言語研究会）、「文教連」（日本文学教育連盟）など、現場の先生たちのつくる国語教育関係の全国組織である。

編集委員会に参加したころ、どなたかから特に説明されたわけではなく、何となく、だんだんにわかっていったことなのだが、日本書籍の小学国語では椋鳩十の「大造爺さんと雁」を教材にしないという判断をしていた。どうしてか。私の理解では、三つの理由がある。たぶん、以前の編集委員会できちんと議論されたのだと思うのだが、その議事録を見せてもらうというようなこともなく、いわば「口伝」だったのだが、私のことばで書き出してみる。古田先生をはじめ、当時の編集委員の大部分がもう亡くなっているから、あらためて確かめることもできない。

「大造爺さんと雁」は、その当時も現在も、小学5年生で教材化されることが多く、もし、日本書籍も採用すると、「共通教材」になる可能性が大きくなる。あまり「共通教材」をふやしたくないというのが、まず、一つの理由だ。

これは、戦後の教科書づくりの理念にかかわっている。戦後間もなくまで、教科書は「国定」で、文部省発行の一種類の教科書が全国で使われていた。その後は、「国定」ではなく、「検定」教科書になる。民間の教科書会社が自由に編集委員会を組み、学習指導要領にしたがって教科書を編集し製作して、いまなら文部科学省に提出して、学習指導要領に見合った内容になっているか、まちがいなどがいないか、チェックしてもらう。これが「検定」だ。検定済の教科書は、公立の小中学校なら各市町村の教育委員会によって検討され、採択される。教科書は、編集委員会それぞれが独自の内容を工夫する「自由競争」に投げ込まれたのだ。

小学校の国語教科書には、1980（昭和 55）年度から、どの教科書でも4年下に「ごんぎつね」（新美南吉）がのっているなど、いくつかの「共通教材」がある。教育現場は、採択される教科書が変わっても、かならず授業ができる「共通教材」をもとめる傾向があるようだが、日本書籍は、あまり好ましくないと考えた。「共通教材」は、「競争」をしていないからだ。

二つめは、「大造爺さんと雁」から「英雄主義」が読み取れないかと考えたこと。「大造爺さんと雁」に登場する雁のなかで名前があたえられているのは、頭領の「残雪」だけだ。爺さんのもとの何年も飼われていた「おとりの雁」さえも、名前がない。「残雪」だけが取れ立てられる「英雄主義」を民主教育の現場に持ち込むことが適当なのか。

三つめは、太平洋戦争前夜の1946（昭和 16）年11月発行の『少年倶楽部』に発表された「大造爺さんと雁」は、大造爺さんと「残雪」の知恵くらべの話ではあるが、当時は、戦争の高揚した気分のなかで読まれたにちがいない。それを現代の教科書で教材化するのはどうなのか。

これらは、編集委員会で共有されていた考えかたで、私自身も納得していたのだけれども、古田先生の意志も強く反映していたものだと思う。

これを最後に撤退することになる 2002（平成 14）年度版の教科書について、古田先生が書いたエッセイがある。「「チイ兄ちゃん」ののった教科書のこと」（日中児童文学美術交流センター機関誌『虹の通信』2002 年 8 月）だ。4 年上の教科書に、戦時下の中国の兄弟を描いた児童文学作品「チイ兄ちゃん」（任大霖作、中由美子訳）を掲載した、いきさつが語られている。これには、私もかかわっている。もとは、日中児童文学美術交流センター編のアンソロジー『チュイホアねえさん 戦火のなかで子どもたちは…』（フレーベル館 1994 年）に掲載されたものだ。

こうして現代児童文学がほとんど教科書にない状態から、あるのが当たり前という状態をつくりだすまで、各社の編集陣と共に努力してきた。ある場合には日書が先頭に立っていたという自負もある。そして、日書教科書には戦争児童文学の系列ができていたが、この数年間編集委員会としてもこのままでよいのかという行き詰まりを感じていた。

前回改訂、また今回の改訂でもぼくは体調不調で編集会議には出席せず、電話で連絡を受けていたが、内心「チイ兄ちゃん」はどうかと思っていた。すると、ある日、宮川さんが電話で「チイ兄ちゃん」を出したいが、枚数がネックになっているといった。聞くと、それほど多い超過ではない。

よし、この機会に「チイ兄ちゃん」を入れよう、とぼくは思った。（引用は古田『現代児童文学を問い続けて』くろしお出版 2011 年所収による。以下も同じ）

「ぼくは日書の編集委員になって以来、原作主義を推進してきたが、今回はそれに目をつむり、のせることを優先にした。」——古田先生は、訳者の中由美子さんに改訳を頼み込み、中さんをとおして著作権者の任大霖夫人にも承諾してもらった。検定も無事にとおり、教科書が使われることになった。先生は、「嬉しかった。」と書いている。

だが、そのあと教科書採択の問題があった。「新しい歴史教科書をつくる会」が編集にかかわった「大東亜戦争肯定史観」といってもよい中学校歴史教科書が扶桑社から発行され、「つくる会」はこの教科書の採択をねらって教員委員会が直接教科書を採択するように運動した。日書教科書は現場教師に支えられていた。この現場の意見がシャットアウトされた。

また日書の中学校歴史教科書はいわば良心的であり、扶桑社の教科書とは対極にあった。「つくる会」の歴史教科書そのものの採択率はゼロに近い 0.03%におわり、多くの人々の批判が実ったように見えるが、各教育委員会は同時にその対極の教科書である日書の中学歴史教科書も採択しなかった。今まで採択していた地域が軒並みに落ち、日書の歴史教科書の採択部数は改訂前の半分以下に激減した。歴史研究者の山田朗は「つくる会」の運動は、「結果的に中学校歴史教科書全体のレベルを確かに右側にシフトさせた」といっている。

中学校の日書歴史教科書不採択は小学校国語教科書採択に連動し、日書小学国語の採択部数もやはり半数以下に落ち込んだ。

少し補足が必要かもしれない。

1997（平成9）年に結成された「新しい歴史教科書をつくる会」（会はその立場を「自由主義史観」と称している）は、「従軍慰安婦」や「南京大虐殺」を取り上げている既存の歴史教科書を「自虐史観」だとして批判した。1993（平成5）年に当時の河野洋平官房長官が韓国政府に対して「慰安婦」制度について謝罪した談話をうけて、それまでのすべての教科書は「慰安婦」について記述していたのだけでも、「つくる会」の批判に配慮せずに、2002年度版でその記述を残したのは、日本書籍だけだった。古田先生が書いているように、「つくる会」の採択はゼロに近かったけれど、対極の日本書籍の採択は5.9%、その前の12.9%から大はばにへらした。（注4）

しかし、私は、中学歴史教科書と小学国語はまったく別のもので、この動きと直接の関係があるわけではないと考えていた。ところが、日本書籍の小学国語の採択は、0.8%まで落ち込んだ。もともと、2～3%だったのが、半分以下になったのである。どうやら、各地の教育委員会で日本書籍が「アンタッチャブルな」ブランドになったのだと思われた。日本書籍は、会社が立ち行かなくなり、2004（平成16）年には倒産する。

私は、教科書というものがすっかりいやになってしまった。それでも、その後、日本書籍小学国語の最後の編集長のFさんにさそわれて、Fさんが再就職した三省堂が新しく発行する小学国語の編集委員会にくわえてもらうことになった。そのことを古田先生におことわりする電話をしたのだが、「Fさんといっしょに……」と話をすると、電話のむこうの古田先生は、ちょっと笑って、「ああ、それは構わないよ」といった。（つづく）

（注）

- 1、自民党の機関紙『自由新報』に1980年1月22日から8月12日まで19回にわたって連載された記事を書籍化したもの。
- 2、教材「おおきなかぶ」は、全社の1年生にのっているが、ここで言及されている西郷竹彦訳と、トルストイ作、内田莉莎子訳の2種類がある。また、アフナーシェフは、ソ連ではなくロシアの、民族学者ではなく民俗学者である。
- 3、鬼頭論文では10月と記されているが、2月発行。
- 4、出版労連発行『教科書レポート2002』（2002年2月）の石山久男「中学歴史教科書はどう書き換えられたか」などの記事を参照した。